

# 砂糖の秩序，タバコのカオス

——フェルナンド・オルティスの『タバコと砂糖のキューバ的対位法』  
におけるキューバ性とカリブ性をめぐって——

安保寛尚

タバコは野蛮性の魔術的贈り物であり，砂糖は文明の科学的贈り物なのだ。(Ortiz 130)

## 0. はじめに

本稿は、「食と甘さの世界変容」の講座で行った口頭発表を土台としている。「甘さと世界変容」というタイトルの裏にあった中心テーマは砂糖貿易で，筆者に任されたのは，これについて特にカリブの文化・文学研究の視点から報告することであった。そのような趣旨に沿って，本稿では，砂糖産業がもたらしたカリブにおける経済的・社会的変容と，砂糖の支配言説に抵抗するカリブの文化的主体性構築の試みを考察する。とりわけ，20世紀前半のキューバにおいて，米国資本に支配された製糖業を批判した民族学者フェルナンド・オルティスの『タバコと砂糖のキューバ的対位法』（1940）の分析に取り組む<sup>1)</sup>。オルティスはこの書で，砂糖とタバコの歴史学的・文化人類学的資料を活用し，またこれらの農作物を文学的エッセーの主役にして，キューバの新たなアイデンティティを探究したのである。「砂糖の秩序，タバコのカオス」というタイトルは，オルティスがそこで示した砂糖とタバコの驚くべき対比や象徴性に着想を得ている。

本稿の構成としては，第1章でカリブにおける砂糖の歴史を概観する。ヨーロッパ，アフリカ，カリブを結んだ砂糖貿易において，砂糖の生産現場となったカリブの変容と，生産地の中心がキューバに移る展開を見よう。やがて製糖業はキューバの経済的根幹を築くが，1920年代に起きた砂糖価格の下落が，欧米に支配された産業構造の問題を露呈させる。第2章では，そのような製糖業の批判において，オルティスが『タバコと砂糖のキューバ的対位法』で示した砂糖とタバコの鮮やかな対照に注目する。第3章では，キューバ的対位法というこのテキストの特殊な構築原理の分析に取り組もう。そして第4章では，タバコのトランスカルチュレイションという現象について考察を行い，タバコに託されたキューバ性を解明する。最後に，以上の分析から見えてくるオルティスのキューバ性の思想は，エドゥアール・グリッサンらが論じたカリブ性と連続性があることを明らかにする。

## 1. カリブにおける製糖業

17世紀以降，ヨーロッパでは砂糖消費量が急増し，砂糖貿易のネットワークが形成された。本章では，その中で生産地として中心的役割を担ったカリブにおける製糖業の展開を見ていこう。ニューギニアからアジア，アラビア半島，アフリカ北部を経てヨーロッパに伝わったサト

ウキビ栽培と砂糖生産の技術は、1493年、コロンブスの第2回航海で新大陸にもたらされた。製糖業が生む利益に先に目をつけたのは、ポルトガルやスペインに遅れて植民地獲得に乗り出したイギリスやフランスである<sup>2)</sup>。イギリスはバルバドスやジャマイカを、フランスはサン・ドマング（現ハイチ、エスピノーラ島の西側）を支配してサトウキビプランテーションを開発し、砂糖を軸にヨーロッパ、カリブ、アフリカを結ぶ貿易ネットワークを構築した<sup>3)</sup>。その結果、西欧においては近代資本主義社会の形成が促進され、産業革命が起こる。しかしカリブに目を向ければ、ヨーロッパ人との接触の結果、疫病や奴隷制によって多くの島の先住民が絶滅に追いやられた。さらに三角貿易<sup>4)</sup>と呼ばれるそのネットワークの一辺は、周知のとおり、先住民に替わる労働力としてアフリカ人奴隷をカリブへと運ぶ奴隷貿易であった<sup>5)</sup>。つまり、砂糖生産の増大と西欧の発展の裏では、人類の歴史において未曾有の暴力が進行していたのである。例えば18世紀のバルバドスでは、およそ1300の製糖工場が建設され、4万人の奴隷が労働し、年間1万トンの砂糖が生産されていた。

ところが18世紀後半、カリブにおける製糖業の構図が大きく変わる。それまで、新大陸で獲得された金・銀などをスペインへ運ぶ中継港の役割を果たしていたキューバが、やがて世界最大の砂糖生産地と化するのである。モレノ・フラヒナルのデータを参考に、どのような変化があったのかを見てみよう。

＜植民地別砂糖国際貿易量＞

植民地宗主国	1760年		1791年		1792年	
	トン数	%	トン数	%	トン数	%
イギリス領	70,593	34.38	106,193	40.17	103,634	56.21
フランス領	80,846	39.27	97,421	36.85	21,234	11.51
ポルトガル領	34,000	16.56	21,000	7.94	21,000	11.39
オランダ領	10,070	4.91	13,550	5.13	13,200	7.18
デンマーク領	4,535	2.20	9,429	3.58	10,824	5.87
スペイン領 (キューバ)	5,550	2.68	16,731	6.33	14,455	7.84
	205,344	100.00	264,324	100.00	184,347	100.00

(フラヒナル 25)

1760年から1792年までの間に、キューバの砂糖貿易量が約3倍になっているが、それはいくつも要因が積み重なった結果である。最初のきっかけは、七年戦争中の1762年に起こったイギリスによるハバナの占領である。占領はわずか3カ月だったが、この期間にスペイン本国から厳しく統制されていたキューバの貿易活動が自由化され、製糖業の近代化と奴隷の導入が進んだ。第二に、1783年にイギリスからアメリカ合衆国が独立すると、その地理的近さから、アメリカ合衆国とキューバとの貿易関係が強化され、砂糖の輸出量が増大した。再度表に目をやり、今度はフランス領における砂糖貿易量に注目すると、1791年から1792年の間に約4分の1以下に急減していることが見て取れる。1791年に始まったハイチ革命によって、当時世界最大の砂糖生産を誇っていたプランテーションが焼け野原となったのだ。3つ目の要因は、それと同時にサン・ドマングの一部の領主や技術者が隣接するキューバ東部に避難してきて、製糖業の最新

の技術を移植したことにある。そしてこの後、1807年にイギリスで奴隷貿易が廃止されると、キューバに「荷揚げ」される奴隷数が急増する。スペインも、1820年までに奴隷貿易の禁止をイギリスと取り決めるが、密貿易が横行したのである<sup>6)</sup>。フラヒナルは、このようなカリブ情勢の変化と1821年以降の奴隷密貿易が、今日のキューバ社会の原型を創り上げたと指摘する。

キューバ製糖業にとって、1821～1860年の期間における奴隷密貿易の特徴的なことは、35万人を下らぬ大量のアフリカ人奴隷の入国であるが、これは（…）巨大な経済的衝撃とはまた別に、このキューバという島国に決定的な社会的性格を定着させて、文化的原型を創り上げ、それが現在まで存続することになったのである。（フラヒナル 304）

実際のところ、製糖業がもたらしたのは奴隷の増加だけではない。かつて多様な作物を栽培していた農業や牧畜のための土地はサトウキビプランテーションに奪われ、価値ある木材がサトウキビの搾汁を煮沸する燃料として大量に伐採された。「糖業ブームは島の経済をゆがめ、他の多くの産業を決定的に放棄させ、食糧不足の問題を引き起こし、風景を徹底的に変えてしまった」（フラヒナル 56）のである。その一方で、砂糖がもたらした経済的繁栄は、「砂糖なくして国家なし」とキューバで後に言われた言葉に象徴されるような、砂糖生産に正当性と権力を付与する支配的言説を生み出した。1857年、フスト・G・カンテロが著した『製糖工場—キューバの主要な製糖工場の景色のコレクション』は、その言説の産物である。そしてこの本に挿入されたフランス人画家エドゥアルド・ラプラントのリトグラフは、視覚的にその言説のあり方を物語っている。



(Cantero 284)



(Cantero 158)

上の2枚のリトグラフに観察できるように、砂糖の支配的言説は、製糖業がもたらした豊かさ、近代的工場、進歩を誇示する一方で、キューバにおける経済構造の変質、原初的風景の破壊、奴隷制の残酷な実態を完全に隠蔽したのだ。

## 2. 『タバコと砂糖のキューバ的対位法』

第一次世界大戦は砂糖価格を高騰させ、キューバ経済は好景気に沸いた。しかし1920年代後半になると、甜菜を材料とする新たな製糖技術の開発などによって砂糖価格は急落し、さらに1929年の世界恐慌の影響がキューバ経済に深刻な影響をもたらした。やがて外国資本に支配された製糖業の構造が露呈し、デモやストライキが多発する。実際のところ、1927年には175の製糖工場のうち75が米国企業によって経営され、その生産量は全体の62.5%を占めた<sup>7)</sup> (Santi 183)。またその頃には、耕作地の半分以上がサトウキビ畑と化し、輸出の80%は砂糖というモノカルチャー経済が進行していたのである (Lecuona 120-121)。そのような半植民地状況に対する批判が知識人の間で起こり始めた。キューバの民族学者、フェルナンド・オルティス (1881—1969)<sup>8)</sup> が1940年に発表した『タバコと砂糖のキューバ的対位法』(以下『対位法』)は、その動きのなかで生まれた。しかしこの作品は、歴史学、文化人類学、文学の境界を侵犯する横断的特徴や、キューバ的対位法という形式と構成によって特異な位置にある<sup>9)</sup>。そこで『対位法』における特殊な製糖業批判について、ここから明らかにしていこう。

オルティスの考察は、タバコと砂糖の二つの農作物の生産方法、消費のされ方のコントラストから出発する。タバコは手をかけて育てられ、葉を巻く繊細な手作業があり、火をつけて煙となって消費される。他方でサトウキビの生育は放任され、山刀で荒々しく収穫された後、葉ではなく茎から絞られた汁が機械によって精製され、できた砂糖は最後には液体に溶かして消費される。オルティスのこのような鋭い観察は、やがて砂糖とタバコのより象徴的な比較へと発展していく。その一つ目が砂糖の均一性とタバコの個別性である。

サトウキビ畑と製糖工場において「選別」はまったく行われぬ。すべてのサトウキビは、まとめてむしろに積み上げられ、圧搾機に運ばれると、すべて同じ一つの絞り汁となり、数個の鍋で煮沸され、数機の遠心分離機にかけられ、何枚かの結晶皿に精製され、ついには同じ大きさの袋に区別なく詰め込まれる。(Ortiz 175)<sup>10)</sup>

それゆえ砂糖は「ありきたりで、格式がなく、区別がつかない」(Ortiz 130)。もちろん、砂糖にも白砂糖や黒砂糖などの種類はあるが、それらは製糖プロセスにおける純度の違いによるものでしかなく、元をたどれば同じサトウキビにたどり着く。ところがタバコにはそのような均一性はない。

タバコにおいて均一性はこれまで決してなかったし、これからもないだろう。(…) 同じ種類のタバコでも、さらには同じ銘柄のタバコでも、それぞれのタバコ畑、栽培、苗、葉には特異性があるのだ。そして種からの繁殖を行うと、変種が誕生することは珍しくない。それは無数の交配と混血、栽培者の欲深い世話、自然の神秘的変異と染色体の気まぐれの結果である。無数の絶えざる変種の誕生、それは偶然のものも引き起こされたものもあるが、タバコの豊かさの秘密はそこにあるのだ。(Ortiz 159)

タバコの種だけでなく、その栽培法と製造過程もまた多様である。タバコの栽培には 92 の工程があり、葉の選別師は 68 の色調を区別できなければならない<sup>11)</sup>。砂糖は結局どれも同じだが、このようにタバコはそれぞれに個性がある。「甘党にとって異なる味の砂糖はないが、喫煙者にとって 2 本と同じ味のタバコはないのである」(Ortiz 164)。

さらにオルティスは、砂糖の人工的な生産プロセスから、厳密な時間や画一的尺度をその性質の一部と見なす。その一方でタバコには、自然に委ねた生産プロセスから、そのような尺度では測れない価値が見出される。

砂糖生産においては、各プロセスにおける精密な時間計測があり、労働時間が決められていて、経営者は国内・国外の株式市場における砂糖の価格相場に、日々注意を払わなければならない。(…)タバコ栽培地の時間は日時計によって計られる。タバコの栽培も収穫も、始業・終業のチャイムではなく、季節、月、雨季と乾季、照り返しと曇り具合、つまり気象現象の気まぐれによって行われるのであり、他でもない黄道 12 星座のリズムに沿っている。また、タバコに認められる性質の様々な価値も、あらゆる尺度 (metrificación) を外れるものだ。色調、香り、味、水分、熟成度、巻き、銘柄帯、タバコが決定する個性の全ては、正確性を測る補助器具なしに、生身の感覚によって経験的に味わわれるのだ。(Ortiz 180-181)

すなわち砂糖には、人工的な精密さや正確さを要求する秩序があり、タバコには自然と人間の手が織り成す無秩序、あるいは西欧科学の知の尺度では測れないという意味でのカオスがある。そして砂糖の人工的秩序は、製糖工場の近代的な機械構造の描出へと容易に接続する。

製糖工場は水や動物、蒸気や電気を動力とする圧搾機、車輪、歯車、ポンプ、鍋、ボイラーや窯からなる巨大なシステムだろうが、それは常に機械、とりわけ圧迫するレバーだろう。(Ortiz 196)

一連の製糖プロセスで、オルティスは工場で連動する機械の各部品、動力をクローズアップし、その巨大なシステムを全体として「圧迫するレバー」と表現している。すると製糖工場は、サトウキビを押し潰し、その汁を絞り出す機械としてだけでなく、プランテーションで働く大勢の労働者を抑圧する巨大装置として浮かび上がってくるだろう。

砂糖産業の発展に伴って、製糖工場は広大な土地を鉄道で結び、領地の全てを管理・経営する一国の首都のように機能していた。しかし前述したとおり、次第に巨大化するプランテーションは、20 世紀のキューバにおいて実質的に外国の資本家に支配されていたのだった。このような経済構造に依存するキューバそのものが、オルティスの目には外国に支配された製糖工場／植民地のように映った。

まるで我々の全ての土地が巨大なプランテーションで、キューバは、名も無い株主が経営する外国の会社によって支配された、大きな製糖工場の象徴的な名前にすぎないかのよう

である。(Ortiz 214)

こうして砂糖は『対位法』において、均一性、機械文明、欧米による植民地支配の象徴としての記号を付与される。タバコがそのような記号と大きく異なるのは、砂糖がヨーロッパから持ち込まれたものであるのに対して、タバコはコロンブスの到着前からカリブの島々で使用されていたという点だ。その土着性によって、「タバコはいつの時も砂糖よりもキューバ的だった」(Ortiz 210)とオルティスは考える。なぜならタバコは、スペインに征服される前のキューバの原始社会と自由を想起させるからだ。

繰り返しになるが、砂糖生産は領地と産業の深い根づき、そして絶えざる巨額の投資ゆえ、常に資本主義的の事業であった。しかしタバコは、処女地に居住した未開のインディオの息子であり、機械のくびきのない自由な果実である。それは压榨機によってズタズタにされる砂糖とは正反対である。(Ortiz 204)

では、「未開のインディオの息子」に喩えられたタバコの原始的用法はどのようなものだったのか。1492年10月12日、コロンブスがグアナハニ島に到着した時、インディオからタバコを進呈されたが、それはカリブの島々の先住民にとって平和と友好を相手に示す行為だった(Ortiz 150)。実際には、彼らの間でその用途は多岐に渡り、葉を煎じたものは口臭予防のうがい液となり、飲用するとリウマチや風邪、消化不良、尿閉の治療薬にもなった。粉末にしたものは、鼻血や鼻水を止める「蓋」となり、また空に蒔いて悪避けにも用いられた。煙は寄生虫や悪霊を払うために使われたが、空にのぼる煙は超自然的な精神や力が可視化されたものと考えられた。医者・呪術師であるベイケ (behique) は、宗教儀式でコオバ (cohoba) と呼ばれるタバコの粉末を鼻から吸い込み、木や石などに宿る精霊セミー (cemi) と対話して治療や占いを行ったのである。つまりタバコは、インディオの間で薬として処方されたほか、宗教儀式で重要な役割を果たしていた(Ortiz 290)。オルティスはこのようなタバコの原始的用法を踏まえて、喫煙を次のように表現する。

タバコを吸うという行為には、キューバの呪術師たちの宗教と魔術の残存がある。タバコを焼くゆっくりとした火は贖罪の儀式のようなものだ。空にのぼる煙は霊を呼び起こすように思われる。香よりもかぐわしいその匂いは、まるで清めの香煙である。(Ortiz 156)

先住民が継承していたタバコの伝統的用法、自然崇拝の宗教的価値は、砂糖が象徴する近代的機械や文明的価値と対照をなす。「タバコは野蛮性の魔術的贈り物であり、砂糖は文明の科学的贈り物なのだ」(Ortiz 130)。こうして砂糖の象徴性は、機械と植民地支配、資本主義、奴隷制、抑圧に結びつく一方で、タバコは土着的先住民文化、自然、自由の象徴性を獲得するのである。

### 3. キューバ的対位法

ここまでのエッセーからの引用から、オルティスがどのように権力を持つ砂糖の言説に抵抗しようとしたのかが見えてきた。この言説において、砂糖は国の経済的基盤としての権威を付与されていたが、オルティスはその実態が、外国による植民地支配と変わらないと述べる。また、砂糖は本来キューバにとって異質な農作物で、「キューバ的」なのは、砂糖と対照的な特徴を持つタバコであることを指摘したのだ。とはいえ『対位法』は、砂糖に替わってタバコを基盤とする経済改革を訴えるわけではない。両農作物の比較を次第に象徴的な次元へと昇華させることで、オルティスが試みるのは、砂糖の支配的言説を覆すようなキューバの文化的主体を探り当てることだ。そのためにオルティスは、砂糖とタバコを二項対立ではなく、「キューバ的対位法」という関係性のなかに配置する。本章では、エッセーにおける文学的パロディと『対位法』の特殊な構成についての分析によって、その関係性を明らかにしよう。

実は前半のエッセーにおける砂糖とタバコの対比は、スペイン中世の文学作品『よき愛の書』(1343)に挿入された、「カーニバルの王 (Don Carnal) と四旬節の聖女 (Doña Cuaresma) の戦い」のパロディになっている。『よき愛の書』は、イータの主席司祭ファン・ルイスによって書かれた作品で、「よき愛」、つまり神への愛と、世俗的な愛についての作者の裡なる葛藤を自伝的フィクションとして記した物語詩である。「カーニバルの王と四旬節の聖女の戦い」は、その中の寓話の一つだ。ファン・ルイスは、カーニバルから四旬節、そして復活祭へと至るキリスト教の行事を、擬人化されたカーニバルと四旬節の戦いとして表現した。そのあらすじを紹介しておこう。

酒池肉林に耽るカーニバルの王とその手下の動物たちが、灰の水曜日の訪れとともに、四旬節の聖女率いる魚たちの軍勢の不意打ちを受ける。脂がのったガチョウや羊のあばら肉、新鮮な豚の脚肉に牛肉の切り身などからなる肉の軍勢と、西洋ネギや塩漬けのいわし、牡蠣やイカ、伊勢海老などの魚の軍勢との間の激しい戦いの末、肉軍は敗北する。そしてカーニバルの王の側近である豚の脂身殿と干し肉婦人が吊るし首にされ、王も投獄される。しかし復活祭の日、カーニバルの王は、監視役の修道士である断食殿をうまく騙して脱獄する。逆襲に恐れをなした四旬節の聖女が、エルサレムへの巡礼の旅に出るところで話は終わる。

オルティスはエッセーの冒頭で、このエピソードを文学的先例に、タバコと砂糖を褐色のタバコの王 (Don Tabaco) と色白の砂糖の聖女 (Doña Azúcar) と擬人化する。そして「詩人としても聖職者としても権威のない我々は」、「韻文ではなく貧しい散文で」両者の驚くべき対比を語るができるかもしれないと述べる。その語りの一部は前章で見たとおりで、様々な観点からのタバコと砂糖の対照的な特徴の記述が交錯し、タバコの土着性と砂糖の異国性が示されるのだった。そうするとエッセーの結末は、『よき愛の書』でカーニバルの王が最後には四旬節の聖女を追い出したように、タバコの王が砂糖の聖女をキューバから追放して終わりそうだ。だが『対位法』は、そのようなタバコの「勝利」では終わらない。オルティスはエッセーの最後になって、実はタバコの王と砂糖の聖女の間には、カーニバルの王と四旬節の聖女の間起こったような戦いはないと話を一転させる。そしてあるのはただお互いへの慎み深さであり、おとぎ話のように結婚と幸福なエンディングを迎えると言うのだ。しかも、タバコの父親であ

るサタンの精神の御技と恩寵によって、砂糖の「極めて不道德な甘いお腹 (dulce entraña de la impurísima azúcar)」に子が宿り、アルコールが誕生する。ついにはキリスト教を冒瀆するかのようになり、「キューバの三位一体とはすなわち、タバコ、砂糖、そしてアルコールである」(Ortiz 250) とエッセーを締めくくる。

『対位法』は、前半が本書と同タイトルのエッセーで、後半は「追加章 (capítulos adicionales)」からなるが、その構成もまた驚きに満ちている。『対位法』でオルティス自身が示した分類は以下のとおりだ。(ページ数は2002年カテドラ版)

(エッセー) タバコと砂糖のキューバ的対位法 (pp.135-250)

(追加章)

第1章: キューバ産タバコの歴史, 民族誌, トランスカルチュレイションとアメリカ大陸における砂糖と黒人奴隷制の開始 (pp.251-253) [本書の構造の説明]

<キューバ産タバコの歴史, 民族学, トランスカルチュレイション>

第2章: 「トランスカルチュレイション」の歴史的現象とキューバにおけるその重要性について (pp.254-260) [「トランスカルチュレイション」の提唱と説明]

第3章: タバコの種について (p.261)

第4章: キューバ産タバコのわずかなニコチン成分について (pp.262-266)

第5章: タバコとその長所についてのイエズス会士の報告について (pp.267-270)

第6章: タバコと癌について (pp.271-272)

第7章: タバコがキューバにおいてどのようにヨーロッパ人に発見されたかについて (pp.273-288)

第8章: アンティール諸島のインディオのタバコ使用方法について (pp.289-413)

第9章: タバコのトランスカルチュレイションについて (pp.414-527)

第10章: キューバ産タバコについてのアンダルシア民謡について (p.528)

---

第19章: 「喫煙者」を意味する“tabacano”と“fumador”について (p.655)

第20章: キューバ産タバコがどのようにして世界を征服したかについて (pp.656-717)

第21章: タバコの中の“tubanos” (刻みタバコを葉で巻いた種類) について (pp.718-720)

第22章: 1850年におけるキューバ産タバコの製造について (pp.721-722)

---

第25章: 世界最高のキューバ産タバコとその真正品の証としての保証ラベル (pp.739-749)

<アメリカ大陸における砂糖と黒人奴隷制の開始>

第11章: “cañal” (サトウキビ畑) やその他砂糖に関する語について (pp.529-535)

第12章: アメリカ大陸における製糖業の開始について (pp.536-549)

第13章: “cachimbos” (小さな製糖工場) と“cachimbas” (パイプ) (pp.550-551)

第14章: アメリカ大陸における黒人奴隷売買の開始, その製糖工場との関係とバルトロメー・デ・ラス・カサスに向けられた非難について (pp.552-627)

第 15 章: キューバの製糖業の舞台に三度現れたサトウキビ農園主について (pp.628-629)

第 16 章: 製糖業が常に恩恵を受けた特権的資本主義について (pp.630-647)

第 17 章: “cañafistola” (土着, 野生のカシアの実) と “cañadonga” (外国産のカシアの実) について (pp.648-650)

第 18 章: 大西洋を渡った最初の砂糖の積み荷について (pp.651-654)

---

第 23 章: アメリカ大陸で起こった最初の黒人反乱について (pp.723-732)

第 24 章: 敵の甜菜について (pp.733-738)

これらの追加章は、前半の文学的エッセーとは異なり、タバコと砂糖について書かれた資料や文献からの引用を多く含む学術的スタイルで書かれている。しかし各章の長さは、わずか 4 行に満たない章 (第 10 章) から 125 ページ続く章 (第 8 章) まで非常にばらつきがある。しかも、2 章から 10 章まではタバコ、11 章から 18 章までは砂糖、19 章から 22 章まではタバコ、23 章と 24 章は砂糖、そして 25 章はタバコについての章となっていて、タバコと砂糖に関する章が規則性なく入れ替わる構成になっているのだ。総ページ数も不均衡で、エッセーが 115 ページであるのに対し、追加章は計 498 ページと、『対位法』の要であるエッセーの 4 倍以上の分量がある。

マドリード大学で法学の博士号を取得した知識人オルティスの、エッセーにおける意外な結末や追加章の無秩序な構造をどう理解したらよいのだろうか? キューバ出身の作家・批評家アントニオ・ベニーテス・ロッホ (1996)<sup>12)</sup> は、タバコと砂糖の対位法にバロック音楽フーガの特徴を見出した。すなわち、タバコと砂糖はそれぞれが異なる旋律と運動を持つフーガの二声と見なすことができ、前半のエッセーにおいてはその語りにおいて、後半の追加章では構造的に相互作用していると考えたのだ。バロック芸術は、古典主義における均衡や調和、秩序への反動から生まれた。それゆえその特徴は、誇張や過剰、いびつさや不規則性、脱中心的性格などにある。フーガにおける多声は、その脱中心性を表現するように、複数の旋律が互いに排除することなく、交錯し、分岐する。そして全体として調和するが、一つに統合はしない相補関係にある。ベニーテス・ロッホは、タバコと砂糖の婚姻によるアルコールの誕生を、統合ではなく、そのような複雑で批判的な関係性の中に共存する新たな声の出現と見なしたのだ<sup>13)</sup>。

しかしながら、本書のタイトルでは、対位法に「キューバ的 (cubano)」という形容詞がついていることに注目する必要がある。しかも原題では、スペイン語で対位法を意味する *contrapunto* ではなく、*contrapunteo* になっているのである。Contrapunteo とは、キューバ農村に伝わる伝統的な民衆音楽の一つで、二人の詩人がある題目について、ギターを奏でながらデシマ (décima) と呼ばれる形式の詩を交代で即興でつくり、その技を競う。『対位法』において、タバコと砂糖はタバコの王と砂糖の聖女に擬人化された。オルティスはさらに、両者の対照的な関係をキューバ農村の吟遊詩人がやりあう「キューバ的対位法 (contrapunteo cubano)」に仕立てたということだ。

ここで、ベニーテス・ロッホ同様、カリブ文学におけるバロックに注目したマルチニックの作家・批評家エドゥアール・グリッサンの考察を援用しよう。グリッサンは、西欧に生まれ

たバロックが、ラテンアメリカの宗教芸術へと展開し、様々な文化との混血によって土着化を果たしたと指摘している（グリッサン 104-106）。オルティスが、フアン・ルイスの物語や聖書の三位一体の教義を引用しつつ、これをキューバ化して西欧の伝統との差異を際立たせていたことを思い起こそう。ベニーテス・ロッホが指摘するように、『対位法』はフーガをモデルに、タバコと砂糖を二つの交錯する声と見なしていることは間違いない。しかし、「キューバ的」という形容詞と *contrapunteo* という伝統的民衆音楽の語彙の使用によって、オルティスはフーガのキューバにおける発展的「逸脱」を『対位法』で提示していると考えられる。また、不均衡な追加章の不規則に入り組んだ構造は、これら二声が奏でるキューバ独自の旋律の運動と交錯の表現に違いない。それはバロック芸術のキューバ的異化であり、グリッサンの表現を用いれば、キューバの土着的バロックとも言えるだろう。

#### 4. 渡り鳥、トランスカルチュレイション

では、土着的フーガを展開したタバコの王と砂糖の聖女が幸福なエンディングを迎え、二人の間にアルコールが生まれるというエッセーの結末はどのように解釈したらよいのだろうか。『対位法』の構成に再度目をやると、追加章は二つのグループに分かれていて、一方が「キューバ産タバコの歴史、民族学、トランスカルチュレイション」であり、他方が「アメリカにおける砂糖と黒人奴隷制の開始」となっている。そして前者のグループの第2章に「トランスカルチュレイションの歴史的現象とキューバにおけるその重要性について」とあるように、オルティスはキューバの歴史において、「トランスカルチュレイション (*transculturación*)」という現象が、「キューバ性 (*cubanidad*)」、すなわちキューバ的独自性の形成に重要な役割を果たしてきたと主張する<sup>14)</sup>。そしてタバコに起こったトランスカルチュレイションが、追加章において明らかにされていくのである。アルコールの誕生はこのトランスカルチュレイションと関わりがあると推測されるが、これはどのような現象なのか。

第1章で見たカリブにおける砂糖の歴史を思い起こそう。サトウキビの導入に始まるヨーロッパ人の入植、植民地支配、奴隷貿易、プランテーションの発展によって、この地域では数多くの民族の移動、到着、離散、混雑が起こった。さらにキューバの入植者は、征服者、司祭、奴隷、商人、平民など様々な身分からなり、移住の目的も多様であった。オルティスは、そのような人々の移動や横断性こそがキューバ性の重要な要素であると説く。

キューバ性にとって、その継続的で劇的で対照的な、入植者たちの地理的移動、そして、経済的、社会的要因による移動が生んだ人的要素、また、いつの時も移ろうその目的や、暮らしを支えるはずの社会と常にうまくいかないことによる居住地からの絶えざる離郷ほど、重要な要素はなかった。人も、経済も、文化も野望も、犠牲を払い、思ったようにはいかず、挫折して、すべてがここでは異国の、仮の、変わりやすいもの、この国を横断する「渡り鳥」と感じられた。(Ortiz 258)

第2章で見たように、タバコと砂糖の比較において、タバコはその原始的な使用法や多様性、

個性性, 自然との深いつながりによって, 砂糖よりも常にキューバ的であった。しかし, それがおルティスの探求したキューバ性を決定的に獲得するのは, 何よりこの「渡り鳥」のような特徴を備えているからなのである。

砂糖は必ず根づく。サトウキビはいったん栽培されると, 永続する不動の機械設備の周辺に残り, 何年も維持される。サトウキビ畑は大規模な植えつけであり, 製糖工場は巨大な植物なのである。タバコは転移する。種は苗床に撒かれ, その後植え替えられて場所を変え, 時にはその後に栽培地からも場所を移して再び植えなければならない。(Ortiz 203)

砂糖は土地に一本の垂直な根を張り, そこを動かず, 製糖工場やプランテーションを生み出す。他方でタバコは, キューバを通過する移民や渡り鳥のように移動し, 植え替えられ, また移動を繰り返す。それゆえ砂糖は, 単一の歴史と「血統」を築き, 正統性を振りかざし, 権力行使して周りを飲み込む。その一方で, タバコは流浪し, 新たな土地で「他者」と接触して変容を遂げるのだ。では追加章で語られる, キューバ産タバコが世界各地で獲得した新たな使用方法と機能について見てみよう。

キューバのインディオの間で薬として処方され, 宗教儀式でも使われていたタバコは, ポルトガルの船乗りたちがアフリカ北部で流通させると, 16世紀前半にはアフリカ大陸全土に急速に浸透した。そこでは, インディオが行ったように, 集会で順番に吸って部族の結束を強化させる役割などが継承されたが, 異なる使用法も誕生した。タバコの粉末とアルカリを混合させるとニコチンの効力が強まる。そこで中央コンゴなどでは, タバコとある種の木材の灰を混合したり, 葉を巻く前に尿を含ませた (Ortiz 428)。また, 地中に掘った穴に, 長い植物の茎の両端を地表に出した状態で埋めてから引き抜き, 一方の穴に火をつけたタバコを差し込んで, もう一方の穴から出る煙を順番に吸う「地中のパイプ」が生み出された (Ortiz 429)。

ヨーロッパに運ばれたタバコにも, インディオの平和と友好の儀式や社会的機能の残存がある。お互いにタバコを勧めること, タバコの火を求めることは, 社会階級を超えた平等, 友好と信頼の証の行為となっている。しかし, その受容のプロセスにおいては, アフリカよりも劇的な変容が起こった。喫煙は, 「醜い悪癖」, 危険な「悪魔の毒」という評価が与えられた一方で, その快楽, 刺激, 鎮痛作用が認められると, 道徳的に正当化する理由づけのために, まず風変わりな観葉植物として, また強烈な匂いを放つ家庭の治療薬として流通した。鼻腔にタバコを詰めるインディオの治療法は北欧に継承されたが, 薬としての興味深いトランスカルチュレーションも起こった。例として, 口からではなく肛門からタバコの煙を入れる処方をした医者が出たほか, スイスやドイツではタバコの煙の注射器が使用されたことがあった (Ortiz 511)。スペインにおいては, 聖職者が教会の10分の1税で得られる収入のための経済的価値を発見し, 積極的にタバコの流通に携わる<sup>15)</sup>。そしてタバコはやがて, チョコレート, コーヒー, 紅茶と並んで, ヨーロッパの外から持ち込まれたエキゾチックな思考の刺激物として浸透していく。

興味深いトランスカルチュレーションのその他の例としては, ハンガリーで様々な色の煙が出る紙巻きタバコが発明され, 女性の間で服装と煙の色を調和させる流行が起こった。あるカトリック教会の雑誌では, その多彩な煙を利用して教会の儀式に色を添える提案まで行われた

のである (Ortiz 521)。戦争では、兵士の戦意を高揚させたり、極度の緊張を緩和するためにも使用されてきた (Ortiz 526-527)。今日においては、高価なタバコは社会的地位や権力の誇示の象徴となっている (Ortiz 464)。そして最終的には、政府の収入にも貢献する経済的機能によって、タバコは資本主義的な砂糖に近づき、白人文化に決定的に挿入されることになったとオルティスは述べる (Ortiz 473-474)。

このように、異文化との接触で発生した予期せぬ創造性によって、タバコはその原始的使用法から隔たる様々な使用法を獲得していった。オルティスは、複数の文化が接触するプロセスにおいては、前の文化が部分的に削除される一方で、新たな文化的創造が起こることを「トランスカルチュレイション」という新語で表現しようとしたのである。特に欧米でタバコに起こった変容は、オルティスにとってまさにその代表例であった。同時にこの現象は、様々な土地から異なる民族が絶え間なく到着し、行き交ってきたキューバという国の形成の歴史と重なり合う。異国からキューバに種付けされ、土地に深く根付き、風景を破壊し経済を支配する砂糖との対比において、移動し、たゆたい、異文化との交流によって新たな創造性を獲得したタバコにこそ、キューバ性があるとオルティスは考えたのだ。

砂糖はトランスカルチュレイションとは無関係であるけれども、タバコはその文化変容を経て、結果的に資本主義的な砂糖に接近する。『対位法』のエッセーの幸福なエンディングは、このように準備されていたことが追加章で明らかになるのだ。タバコの砂糖への接近は、タバコに託されたキューバ性の喪失のように見える。しかしオルティスにとって、実は横断性と変容力を備えた様々な「野蛮なもの」がキューバ性を獲得しうるのである<sup>16)</sup>。詳細は稿を改めるが、その観点から言えば、『対位法』のエッセーにおける語りとユーモアにもキューバ性の現れを見ることが可能であるように思われる。エッセーの結末を思い出そう。タバコと砂糖の子として誕生するアルコールの正体は、砂糖生産の副産物であるラム酒であるに違いない。オルティスはユーモアと機知を働かせ、一方で母親から受け継いだ砂糖の甘みを持ち、他方で父親のタバコのように鎮静作用や快楽、酔いをもたらすラム酒こそ、両者の混血の産物にふさわしいと考えたのだ。そしてそれは、キューバの対位法という発展的に逸脱したフーガの相互作用のプロセスを経て、タバコと砂糖の間に起こったレトリック上のトランスカルチュレイションの果実である。

## 5. おわりに

砂糖はヨーロッパ、アフリカ、カリブを結ぶ貿易網を形成し、世界を変容させた。その生産地となったカリブでは、数多くのプランテーションが建設され、フラヒナルが指摘したように、風景が一変しただけでなく、社会的原型もまた砂糖によって形づくられた。その後、植民地時代が終わっても欧米資本による経済的支配は続き、製糖業に正当性や権威を与える言説が形成される。本稿では、『対位法』のテキスト分析を通して、オルティスによるそのような状況の批判と、キューバ性という文化的主体性構築の試みの解明に取り組んだ。その結果、オルティスはタバコのトランスカルチュレイションに観察される、キューバに土着的なものが他文化との接触によって生じる変容にキューバ性を見たことが明らかとなった。そして、本稿では示唆す

るにとどめたが、キューバの対位法の語りとユーモアには、タバコとはまた別のキューバ性の現れがあると考えられることを指摘した。

トランスカルチュレイションの理論の根底には、オルティスの進歩主義が見え隠れすることは否めない。すなわち、オルティスの思想の根本には、原始的で野蛮なもの(カオス)が西欧文明(秩序)と接触することによって、「白人化」と「進化」を遂げるという考えが透けて見えるのである。しかしながら、プランテーション・システムへの抵抗、二項対立に陥らない対位法、タバコに見出された移動性と文化変容が、近年のカリブにおける文化的主体性の探求に接続する可能性を持つことは間違いない。

実際に、オルティスが砂糖に見た西欧文明の根つきとタバコに見た移動性の対比は、前述したグリッサンの「関係の詩学」を呼び起こさずにはいない。グリッサンは、全体主義的な単一の根、不寛容な根が法を樹立する定住生活に、ドゥルーズとガタリが提起したりゾーム(根茎)、すなわち網状組織として広がる多数化した根を対置させる。それが西欧の普遍的イデオロギーに抗する、周縁的な「流浪の思考」だ。そしてノマディズム(遊動生活)、亡命・流浪・漂流こそ存在を解放する生き方として肯定したのだった。その生き方は、他者との関係を開き、中継し、結びつける。それは一方が他方に従属する関係ではなく、お互いに等価な存在として、相互作用を行い、複雑性のゆらぎの中で逸脱し、蛇行し、予測不可能な果実を生み出す。グリッサンは、そのような果実の例として、複数言語の接触と相互作用によって生まれたクレオール語を挙げた。『対位法』においては、『よき愛の書』のパロディとキューバの対位法によって、権威づけられた砂糖に対し、個別性や自由という価値づけをされたタバコが対等にやり合い、ついにはレトリックの混合物としてのアルコールが生まれる。これらの産物には、グリッサンとオルティスに共有されるカリブ性の思想を見ることが可能であるように思われる<sup>17)</sup>。

\*本研究はJSPS 科研費 JP18K00516 の助成を受けた。

## 注

- 1) 本稿は、『対位法』のエッセーにおける不敬なユーモアに注目した拙論(2016)の延長線上にあり、これと一部重なる内容があることを断っておく。
- 2) 1493年、コロンブスはエスパニョーラ島でサトウキビの栽培に着手した。しかしスペインのカナリア諸島でも栽培がすでに行われており、競争を避けるためすぐには大規模な砂糖生産への取り組みが開始されなかった。また、スペインは金鉱を求めて大陸に進出したのであり、カリブの島々はスペインと新大陸を結ぶ貿易の中継地点、そして海賊からの攻撃を防ぐ要塞としての機能の方が重視された。
- 3) 当時の貿易における砂糖の重要性は、17世紀には砂糖が国際貿易取引の合計金額で第一位を占めていたことに示されている。
- 4) アロンソンとブドーズは、「三角貿易」と呼ばれる貿易は、それほど単純ではなかったと指摘している。ヨーロッパからアフリカへの輸出品の35%は織物などインドの産物であった。これを得るためにイギリス人、フランス人、オランダ人はインドを目指した。他方でスペイン人は、ボリビアのポトシ銀山で採掘した銀を積んでフィリピンのマニラでアジアの産物を購入した。つまり、「三角貿易」は3辺だけで完結するものではない。二人は世界的広がりを持つこの貿易を「球面貿易」と呼んでいる(アロンソン/ブドーズ 51-52)
- 5) 1999年に公開された大西洋奴隷貿易データベースによると、アフリカ各地から輸出された奴隷の数

- は12,521,332人で、そのうち生きて新大陸に上陸したのは10,702,300人である（布留川25, 32-33）。
- 6) イギリスとスペインは1817年に、3年後の1820年6月をスペイン領植民地にアフリカ人導入の最終期限とする取り決めを行うが、これは果たされずに密貿易が横行した。その要因には、仲介業者の暗躍や、アフリカ西海岸（ギネア湾）から東海岸（モザンビーク）に奴隷貿易の拠点が移動したこと、また米国の奴隷商とキューバ製糖業者のつながりが強固になっていたことなどが挙げられる。
  - 7) キューバの製糖業における外国資本の流入は、2度にわたるキューバの独立戦争から始まっていた。第一次キューバ独立戦争は1868年から1878年まで続き、1895年に始まる第二次キューバ独立戦争は、1898年に米西戦争へと拡大した。長期間にわたる戦争によってプランテーションが荒廃し、米西戦争の結果、米国の半植民地状態に置かれると、そこにとりわけ米国資本の流入が起こった。
  - 8) オルティスはハバナ生まれだが、生後すぐにスペインに移住し、マドリード大学で博士号を取得するまでおよそその地で過ごした。キューバ独立の1902年に帰国し、犯罪民族学への関心から、アフリカ起源の宗教実践と犯罪との関わりの研究に着手する。しかし、やがて黒人文化をキューバのアイデンティティの一部と評価する方向に転換し、多くの民俗学研究を発表した。
  - 9) 『対位法』は、その解釈の困難さもあって刊行当初は反響に乏しかったが、1980年代以降、カルチュラル・スタディーズやポルトコロニアルの分野で注目を集めることになる（Santi 74-75）。
  - 10) 以下、引用はすべて拙訳である。
  - 11) タバコ製造の複雑なプロセスと多様な組み合わせを確認するために、オルティスがハバナのあるタバコ工場にある銘柄のコレクションを調べたところ、これまでに生み出されたブランドの数は996種類にのぼるといふ。
  - 12) ベニーテス・ロホは1931年キューバ生まれの作家・批評家である。米国とメキシコに留学し、帰国後は作家として活躍した。国立文化機関カサ・デ・ラス・アメリカスの機関長などの重職を務めたが、後に米国に亡命し、アマースト大学で教鞭を執った。
  - 13) 対位法の脱中心的特徴から、ベニーテス・ロホは『対位法』が、ボルヘスの作品と同様、スペイン語文学におけるポストモダンの先駆的作品であると評する。しかしながら、近代文明が浸透しなかったカリブにおいては、アフリカの伝統や分野横断の雑種性があり、これらの要素を含む『対位法』は、ポストモダンの枠に収まらないカリブの言説であると位置づけた。
  - 14) 当時の文化人類学では、異文化接触がもたらす文化変容には「アカルチュレイション（acculturation）」という用語が用いられていた。しかしオルティスは、この用語はある文化が他の文化を獲得することしか意味しないと批判した。それに代わる用語としてオルティスが提唱したのが「トランスカルチュレイション」である。『対位法』のイントロダクションには、文化人類学者マリノフスキーがオルティスに宛てた手紙がそのまま掲載されていて、この新語の有効性を認めると記されている。
  - 15) オルティスは、スペイン人聖職者が税収入のために積極的にタバコの流通に関わったことについて、「結局のところ、悪魔はその誘惑の手を伸ばし、そのように聖職者の所得も増やしていったのである。そして悪魔と司祭の関心は、根本的な道徳的矛盾にもかかわらず、キリスト教の民の間でタバコを流通させることで意見が一致したのだ」（Ortiz 472）と述べる。この道徳的腐敗への言及は、タバコの父であるサタンの精神の御技と恩寵によって、砂糖の聖女が妊娠するというエッセーの結末との関係を思わせる。
  - 16) 他に他文化との接触によって変化を遂げ、オルティスがキューバ性を見た例としてキューバのシチュー、アヒアコを挙げることができる。アヒアコについては拙論（2017）を参照されたい。
  - 17) グリッサンと、『対位法』にカリブ性を見たベニーテス・ロホの二人が、現代科学の展開とカオス理論にカリブ文化との親和性を見出していることは注目される。ニュートンによって築かれた古典科学は、機械論的世界観と普遍的法則を普及させたが、20世紀に入って、相対性理論、量子論が宇宙の多元的で複雑な性質を明らかにした。そして「複雑系」の科学が、実在のほとんどは不安定性、多様性、非平衡、無秩序によってゆらいでいることを明らかにしている。ここで重要なのは、その複雑なシステムが、秩序と無秩序の絶えざる相互作用とバランスの上に成り立っているということ、そしてどちらか

一方が他方に従属する関係ではなく、お互いに等価性を持つということだ。これがベニーテス・ロッチにタバコと砂糖の対位法を想起させ、グリッサンにバロック的逸脱と拡がり、接触と増殖を連想させた。グリッサンの言葉では、「現代科学の諸概念は、バロックのこうした拡がりとの出会い、それを確認している」(グリッサン 104) のである。つまり、カリブの文化的主体性の探求において、現代科学がその理論的援助を提供しているのだ。

## 参考文献

- アボット, エリザベス (2011) 『砂糖の歴史』 樋口幸子訳, 河出書房新社.
- アロンソン, マーク / ブドーズ, マリナ. 2017. 『砂糖の社会史』 花田知恵訳, 原書房.
- 安保寛尚 (2016) 「フェルナンド・オルティスの『タバコと砂糖のキューバ的対位法』をめぐる一考察 (1) - キューバ性とトランスカルチュレイションについて -」, 『立命館言語文化研究』 第28巻2号, pp.129-146.
- (2017) 「カクテルとアヒアコ-キューバ国民統合の隠喩とレトリックについて -」, 『立命館経営学』 第55巻5号, pp.1-26.
- エルティス, デイヴィッド / リチャードソン, デイヴィッド (2012) 『環大西洋奴隷貿易歴史地図』 増井志津代訳, 東洋書林.
- 川北稔 (1996) 『砂糖の世界史』, 岩波ジュニア新書.
- グリッサン, エドゥアル (2000) 『<関係>の詩学』 菅啓次郎訳, インスクリプト.
- ルイス, フアン (1995) 『よき愛の書』 牛島信明, 富田育子訳, 国書刊行会.
- フラヒナル, マヌエル・モレノ (1994) 『砂糖大国キューバの形成 - 製糖所の発達と社会・経済・文化』, 本間宏之訳, エルコ.
- プリコジン, I. / スタンジュール, I (1992) 『混沌からの秩序』 伏見康治ほか訳, みすず書房.
- 布留川, 正博 (2019) 『奴隷船の世界史』, 岩波新書.
- 吉永良正 (1996) 『「複雑系」とは何か』, 講談社現代新書.
- 和田光弘 (2018) 『タバコが語る世界史』 (世界史リブレット 90), 山川出版社.
- Benítez Rojo, Antonio (1996) *La isla que se repite: El Caribe y la perspectiva posmoderna*, Ediciones del Norte, Hanover.
- Cantero, Justo G. (2005) *Los ingenios: colección de vistas de los principales ingenios de azúcar de la isla de Cuba*, Ediciones Doce Calles, Madrid.
- Lecuona, Óscar Zanetti (2012) *Esplendor y decadencia de azúcar en las Antillas hispanas*, Editorial de Ciencias Sociales, La Habana.
- Ortiz, Fernando (2002) *Contrapunteo cubano del tabaco y el azúcar*, Ediciones Cátedra, Madrid.
- Perdomo, José E (1998) *Léxico tabacalero cubano*, Ediciones Universal.
- Santí, Enrico Mario (2002) *Fernando Ortiz: Contrapunteo y transculturación*, Editorial Colibrí, Madrid.

